

# 大阪文学学校 作家育て60年



「たいま、と言いたい」と語り、元同級生や在校生らと創作秘話や思い出話で盛り上がる朝井まかてさん(中央) 16日、大阪市中央区の大阪文学学校で

多彩な書き手を輩出してきた「大阪文学学校」(文校、長谷川龍生校長)が「還暦」を迎える。草の根文学運動の母体として営々と活動を続け、巣立った人は1万2500人にのぼる。ウェブで簡単に自作を発表できる時代に、互いに批評し合うアナログな合評会で腕を磨いている。

今月16日、文校修了生初の直木賞作家となった朝井まかてさん(54)を「祝う会」が開かれた。2006年に在籍していた朝井さんは、元クラスメイトら80人以上を前に、「やっとホームに帰ってきました」とあいさつ。思い出の教室は、和や

## 芥川・直木賞輩出 合評で腕磨く

かなムードに包まれた。



田辺聖子さん

文校は1954年、大阪生まれの詩人・小野十三郎(1903〜96)が初代校長となり発足。前年に東京で「日本文学学校」が誕生したことが刺激となったという。70年代には京都、神戸、福岡、埼玉、横浜、千葉にも姉妹校が出来たが、現在も活動しているのは文校のみ。大阪市中央区谷町7丁目のビルに教室と事務局がある。

当初は夜間部のみで、働く人々で新しい文学を創造するという理念のもと、事務員や工員らが参加。平均年齢は23歳だった。昼間部、通信教育部が加わり、定年退職者や子育てを終えた女性が増えた現在は、19〜92歳の362人が在籍する。芥川賞作家の田辺聖子さん(85)、玄月さん(49)も文校の卒業生。創立当時から



玄月さん

今も続くメインの行事が、週一回、生徒同士が批評しあう組合(合評会)だ。田辺さんは、当時を振り返るエッセーに「合評が終わると仲間たちはそのまま別れることはなく、上六の盛り場や、キタの曾根崎で飲んだりした」と書く。

インターネットを使えば、誰でもすぐに作品を発表できる時代に、なぜ顔をつき合わせる合評会なのか。「宇喜多の捨て嫁」で2012年「オール読物新人賞」に選ばれた生徒、木下昌輝さん(40)は、「素晴らしいものを書く仲間と実際に会うのは何よりの刺激。負けたくない、すごいのを書きたいと思う」と話す。

機に見舞われたが、そのたびにカンパを募るなどして乗り切った。事務局長の小原政幸さん(61)は「関西に文学の灯を絶やさないよう頑張ってきた」と感慨深げに話す。

26日には、大阪市中央区のドーンセンターで、創立からの歩みをスライドで振り返る記念講演会がある。



# 大阪文学学校 生身の魅力

## 戦後創設 田辺聖子さんら輩出

半世紀余りに創設され、若き日の田辺聖子さんや玄月さんが小説の書き方を学んだ「大阪文学学校」(大阪府中央区)。今も500人が学び、22日には修了生、光本正記さん(34)のデビュー作が新潮社から出版された。ネットを媒介とした作品発表や批評、投稿が拡大する中、何が作家の卵らをひきつけるのか。

土曜の昼下がり、谷町筋沿いの雑居ビルの一室で20歳代から60歳代の男女11人が原稿用紙のコピーの束を手に熱心に議論していた。

「情景が目には浮かんでく  
るようやね」「主人公の反  
応が、ちょっと淡泊すぎる  
んじゃないか」――。

「文校」名物の合評ゼミだ。1クラス十数人が作品を順番に持ち寄り、1回2作品を自由に、徹底的に批評し合う。時間制限はなく、4時間に及ぶこともある。

受講料は年12万円。カルチャースクールのような懇切丁寧な指導はない。退職後の楽しみでつづる人から

大阪文学学校 1954年創立の市民講座で現在は社団法人大阪文学協会が運営。初代校長は詩人の小野十三郎さん。過去には作家の眉村卓さんや詩人の荒川洋治さんが講師を務めた。受講者の累計は1万2000人に上り、医師や弁護士、日雇いの労働者ら様々。通信講座もあり、一昨年にはライトノベルクラスを新設した。OBに作家の朝井まかてさんや藤岡陽子さん、2011年、文学界新人賞を受賞した馳平啓樹さんがいる。

## 合評「自分ならどう書くか考える」



老若男女が自由に意見をぶつけ合う合評ゼミ。激しく意見がやりとりされることもある(大阪府中央区の大阪文学学校で)

欠。文学なら筆一本で同じ感動を表現できる」と2010年から1年間学んだ。今回刊行した「紅葉街駅前自殺センター」は昨年、新潮エンターテインメント大賞に輝いた「白い夢」を改題した作品で、冒頭100枚をゼミに出した際のやり取りを、今でも鮮明に覚えていてという。

3年前入学したフリーライター、木下昌輝さん(38)は昨年、時代小説「宇喜多の捨て嫁」でオール読物新人賞(文芸春秋)を受賞した。文学なら筆一本で同じ感動を表現できる」と2010年から1年間学んだ。今回刊行した「紅葉街駅前自殺センター」は昨年、新潮エンターテインメント大賞に輝いた「白い夢」を改題した作品で、冒頭100枚をゼミに出した際のやり取りを、今でも鮮明に覚えていてという。

1994〜95年、在籍した玄月さんの話「合評は、表情や話し方で読み込みの具合が分かり、ごまかしは利かない。ネットでも多くの反響は来るだろうけど、本当に腕を磨くなら生身の人間が一番なのでしょう」